

-7 施設の活用

魚がのぼりやすい川づくりで整備した魚道等を、住民や関係者に広く公開し、活用を図ることで事業 PR や河川環境に係る意識啓発等につなげることができる。

活用の事例としては、環境学習や調査研究の場として提供すること等があげられる。

1. 環境学習

近年は、小中学校において総合学習の時間が設けられ、その中で環境についても学ぶ機会が増えている。

また、流域住民の河川環境に対する関心も高まっているため、魚がのぼりやすい川づくりで整備した魚道等を環境学習の場として提供することを検討する。

とくに、魚道観察室は、魚道内を安全に見学できるため、環境学習の場として適している。

【環境学習の場としての施設の活用事例】

< 魚道観察室の見学 >



(和歌山県・紀の川・紀の川大堰)

出典) 紀の川魚がのぼりやすい川づくり推進モデル事業 技術レポート

< 魚道における自然観察会 >



(熊本県・球磨川・球磨川堰)

【魚がのぼりやすい川づくり推進モデル事業の進展による住民意識の啓発の事例】

鹿児島県の奄美五河川は平成5年に「魚がのぼりやすい川づくり推進モデル河川」の指定を受け、魚道の設置・改築等、魚介類の遡上・降下環境の改善に取り組んでいる。

奄美五河川には環境省のレッドデータブックで絶滅危惧 A類に指定されているリュウキュウアユが生息しているが、本土のアユとは異なり、遊漁の対象にもなっていないことなどから、モデル事業開始当時はリュウキュウアユに対する住民の関心は必ずしも高いとはいえなかった。

しかしながら、事業を進めるにつれて、リュウキュウアユや河川環境に関する関心が徐々に高まり、奄美リュウキュウアユ保存研究会の呼びかけにより、現在ではリュウキュウアユの産卵場の改善が行われるようになった。



小学生等によるリュウキュウアユの産卵場の改善
(鹿児島県・奄美五河川・川内川^{かわうちがわ})

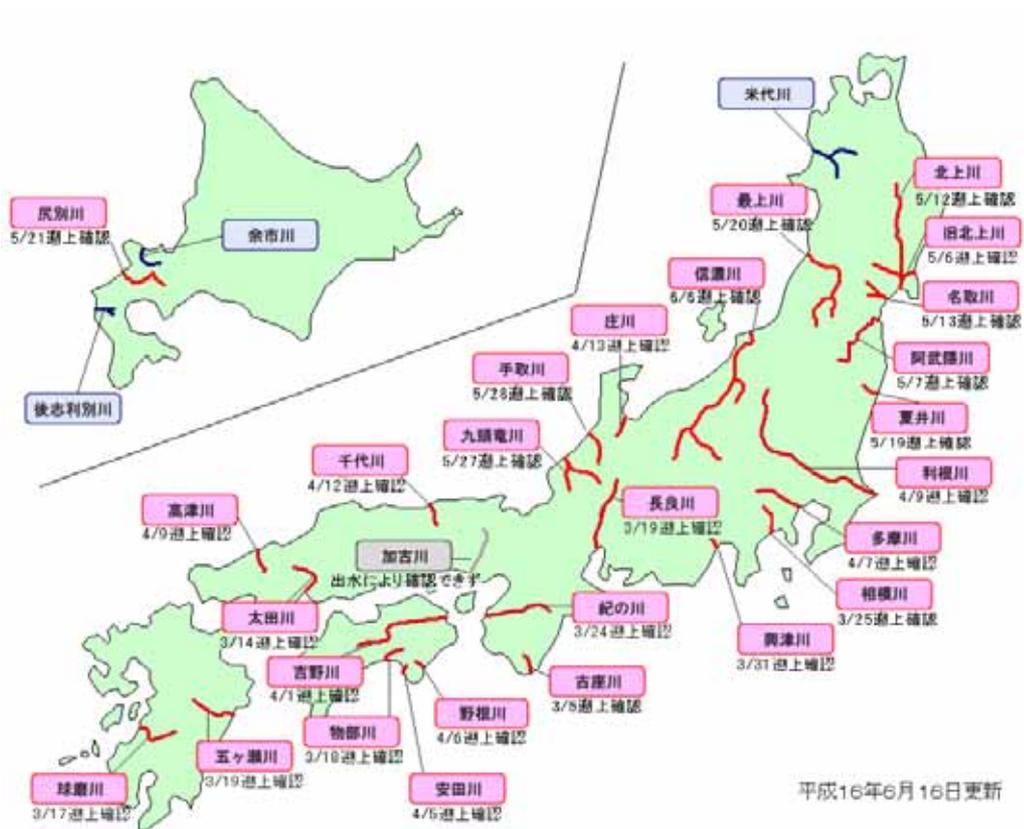
出典) 奄美五河川魚がのぼりやすい川づくり推進モデル事業 技術レポート

2. 調査研究

研究者にとっても、魚の遡上・降下行動を観察できる機会は多くはないが、魚道観察室等では容易に観察できる。

また、行動観察により、魚道技術の将来的な発展につなげることもできるため、このような調査研究の場として施設を積極的に活用することも重要である。

< アユ遡上時期の調査及び情報提供 >



国土交通省は、魚がのぼりやすい川づくり推進モデル事業で整備した魚道等のある全国 27 の河川において、各都道府県の水産試験場や漁業協同組合の協力を得ながらアユ遡上状況の情報提供を行っている。

なお、アユの遡上状況は「アユの遡上前線」としてホームページ上で公開されている。

出典) 国土交通省河川局 HP

<http://www.mlit.go.jp/river/ayu/index.html>